

令和3年度 第2回 福祉援護センターのあり方に関する懇話会議事録

日 時：令和3年10月8日（金） 15時00分～16時00分

会 場：横須賀市役所分館1階 福祉部会議室

出席者：当日配付資料の委員名簿参照（欠席者：佐久間委員）

1 開 会

2 議 事

事務局より、本日の議論、資料について説明した。

各委員からの意見は、以下の通り。

- ・前回会議の時にかがみ田苑自体の自己分析、認識を聞きたいとありましたので、事務局から説明をお願いします。

- ・事務局（かがみ田苑の自己評価（分析）ヒアリングについて報告）

平成24年開所当時の利用者については、10名定員のところ9名で、その後は減少に転じている。直近では、平成29年度は5人、平成30年度は3人、令和元年度は4人、令和2年度は2人、今年度は0人という状況。

利用者減少の原因として、障害者の法定雇用率の見直しにより企業の障害者雇用のニーズが高まり、養護学校からの障害者雇用枠での就労者が増えたため、かがみ田苑の利用が減少したのではないかと。

もうひとつは設置場所。交通の利便性など立地条件が悪く、駅前等に就労移行支援事業所が増えているので、減少したのではないかと。

その上で、現状の役割として利用者を増やしていくことは難しいと認識している。

- ・養護学校卒業後の就労移行支援の現状は、法定雇用率が上がったから＝（イコール）ではない。一人一人の力にあったところに合わせて決めている。近年で言えば、卒業後すぐに就労移行支援を使う生徒は減少傾向にあったが、今年は増えている。制度によらず、その年で状況は違う。資料にあるように、かがみ田苑へ実習やアセスメントに行くことは少ない。アクセスが悪いこともある。事業者も増えて選べるようになってきた。

- ・立地に関しては、就労移行支援は回転が速く、行きにくい場所の利用者集めは不利だと思う。自分たちは常に見られて選ばれる側のプレッシャーを感じている。サービスの質、実績、第1印象、建物、立地を含めて見学に来て、どう思っただけかを気にしながら、利用者を選んでもらうという点では一概に何か一つの原因があるわけではなく、いろんな要素

が絡み合っていて、サービス業をしているイメージである。サービスに合う方、合わない方がいるし、逆に、現状をお伝えして今は就労移行支援ではないということで地域の相談支援の方たちの信頼を得ることもある。これをやったから利用者が集まるということではない。本人だけではなく地域の関係機関にもここに相談したら何とかなると思ってもらえるようになるには時間がかかる。利用者に選んでもらうのは、簡単なようで一番難しい。

・利用者に選んでもらうためには、就労にうまく支援して実績を積んで、その繰り返しの中で培われていく必要があり、地域性、ネットワークを含め情報共有される中で選んでもらう必要がある。ニーズも変わってきていて、傾向もその年で違う。その不安定な中でやりくりしながら事業を運営していく大変さがあるということ。

続いて、横須賀市全体の事業所の状況を踏まえた視点から発言をお願いしたい。

・市内の就労移行支援事業所の状況について、資料によると0人や定員を越えているなど、事業所側からどのようなサービスがきちんと提供できるか明確でないと、事業所に対する信頼は違っていく。数字で正直に表れてくる。生活介護であっても地域作業所であっても同様で、どこについても通じていて、どういう形でサービスを提供していくか明確でないと利用者は離れていく。

平成23年に指定管理者選考委員会の委員として参加した時は制度が未成熟だった。議論の中で、市内での不足サービスは何かというと、就労移行支援事業と、地域で就職するための制度が不足していた。

その時に、就労支援員の常勤配置があった。就労移行支援事業を受ける代わりに、就労支援員をきちんとしていきますよということだったが、その後、検証をせずにやりっぱなしだった。利用者をアセスメントすることができていたのかどうか。公費を投入して、委託をする時に役割を与えたが、その後、1年ずつの評価をしてこなかった。今回、委託をまた採択するにあたり、検証をしていくべきだと思う。かがみ田苑をこのまま続けていく必要性があるかどうか。かがみ田苑の役割として、代わりに何を行っていくか、その先の定期的なモニタリング、評価が必要である。

・経緯を踏まえてお話いただいたが、かがみ田苑として就労移行支援事業の評価してこなかったところを踏まえて、かがみ田苑が就労移行支援を継続するには、実績を評価して議論して、求める役割を再認識して、事業を展開していくということではよろしいか。

それぞれの立場からのご発言いただいて、その延長線上で今後どのようにするのか議論していきたい。

・公立施設としてのかがみ田苑の就労移行支援事業は役割を終了したのではないか。数字が物語っているし、それぞれの立場での発言から答えは見えているのではないか。

補足として、市内各事業所の現場に入り見ていくと、人が集まる事業所は努力している。選んでもらうためにこだわりをもち、どれだけ実績を積めるかというところで端的に表している。一方で、事業所をたたむところもある。これが福祉の現状ではないか。就労移行支援としては民間が切磋琢磨している中で、かがみ田苑は公立としての任務は終えてよいのではないか。

・平成 23 年当時には役割があったかもしれないが、今は他の事業所でできるところが増えてきている。利用者が利便性などで選べる等、数字が表している。

・資料、それぞれの立場から、公的機関の役割として、かがみ田苑は、就労移行支援の役割を終えたという共通認識。

・県立施設の役割が議論されているのと同じように、公立施設で民間に委託していたとしても、一定の役割を持ってもらわないと困る。市内は社会資源が潤沢ではない。かがみ田苑から出ることのできない重度、強度行動障害の問題で、どうしたらその利用者を地域に送り出していけるか、その仕組みを作っていくことができるか。受けてくださいだけではできないと思う。

県立施設の役割の時にも話したが、県立施設職員、かがみ田苑の職員は忙しいというが、地域に目を向けていくことをしない限り、連携してやっていくことはできない。

重度の障害者については、きちんと環境整備をしていく。どうしたらできるか。かがみ田苑は、恵まれている。広い設備があり利用者も逃げる場所があるが、狭い作業所では逃げ場がない。その時にその人の障害の部分に関してどう支援して、狭い空間であっても落ち着いて過ごすことができるか、そういうものを作っていくか。公立で期限があり、利用者を出さなければいけないところの役割だと思う。いろんな実態を見ないといけない。もう一つ、狭い場所でしか事業ができないのであれば、どのように作っていくのか一緒に考えていく必要がある。今、企業が生活介護や就労継続支援 B 型をやっていて、お金のかけるところ、かけ方が違う。

かがみ田苑で、できないならネットワークで作っていけばよいと思う。他の事業所の職員を活用して、体制を作らない限り、公立でたくさんのお金をかけて委託している役割は何なのかと思う。かがみ田苑の委託料について苦言を呈している作業所の職員もいる。見える形を作り、市民にも納得してもらえるものにしてかなければならない。

・平成 23 年当時、就労移行支援事業所が市内に 1 か所もなかった中で最初に作った意義はある。

その後、民間が切磋琢磨して力をつけていき、就労継続支援 B 型もそうで、工賃によって報酬が変わってくるので、作業工賃を上げるために利用者と一緒に切磋琢磨して、そこは民

間ならではの知恵と力で高められている。

その一方で、県立施設等は、行き場所のない障害者を受けているが、個人的な感覚としては支援より預かっている感覚。支援と預かることは違う。その障害者が主人公として生きていけるような支援は、地域が基盤とならなければいけない。そういう事業展開を期待して今後どうするか。

今回は、かがみ田苑の就労移行支援の一定の方向性が出せれば良いと思う。今日の議論の中では、就労移行支援については、公的施設としての役割としては終わっている。違う公立施設の役割としてはどうあるべきか検討していく必要がある。

3 閉 会